多神教

泉鏡花

場所

美濃、三河の国境。山中の社——奥の院。

名

白寮権現、媛神。(はたち余に見ゆ)神職。(榛貞臣。修験の出)禰宜。(布気田五郎次)老いたる禰宜。雑役の仕丁。(棚村久内)二十五座の太鼓の男。〆太鼓の男。笛の男。おかめの面の男。道化の面の男。般若の面の男。後見一人。お沢。(或男の妾、二十五、六)天狗。(丁々坊)巫女。(五十ばかり)道成寺の

白拍子に扮したる俳優。一ツ目小僧の童男童女。村の児五、六人。

禰宜　（略装にて）いや、これこれ（中啓を挙げて、二十五座の一連に呼掛く）大分日もかげって参った。いずれも一休みさっしゃるが可いぞ。

この言葉のうち、神楽の面々、踊の手を休め、従って囃子静まる。一連皆素朴なる山家人、装束をつけず、面のみなり。——落葉散りしき、尾花むら生いたる中に、道化の面、おかめ、般若など、居ならび、立添い、意味なき身ぶりをしたるを留む。おのおのその面をはずす、年は三十より四十ばかり。後見最も年配なり。

後見　こりゃ、へい、……神（かん）ぬし様。

道化の面の男　お喧（やかま）しいこんでござりますよ。

〽太鼓の男　稽古中（けいこちゅう）のお神楽で、へい、囃子（はやし）ばかりでも、大抵村方（むらかた）は浮かれ上（あが）っておりますだに、面や装束をつけましては、媼（ばば）、嬶々（かか）までも、仕事稼（かせ）ぎは、へい、手につきましねえ。

笛の男　明後日（あさって）げいから、お社（やしろ）の御（ご）祭礼で、羽目（はめ）さはずいて遊びますだで、刈入時（かりいれどき）の日は短（みじけ）え、それでは気の毒と存じまして、はあ、これへ出合いましたでござえますがな。

般若の面の男　見よう見真似の、から猿踊りで、はい、一向にこれ、馴れませぬものだでな、ちょっくらばかり面をつけて見ます了見の処。……根からお麁末な御馳走を、とろろも鱠も打ちまけました。ついお囃子に浮かれ出いて、お社の神様、さぞお見苦しい事でがんしょとな、はい、はい。

禰宜　ああ、いやいや、さような斟酌には決して及ばぬ。料理方が擂鉢俎板を引くりかえしたとは違うでの、催ものの楽屋はまた一興じゃよ。時に日もかげって参ったし、大分寒うもなって来た。――おお沢山な赤蜻蛉じゃ、このちらちらむらむらと飛散る

処へ薄日の射すのが、……あれから見ると、近間ではあるが、もみじに雨の降るように、こう薄りと光ってな、夕日に時雨が来た風情じゃ。朝夕存じながら、さても、しんしんと森は深い。（樹立を仰いで）いずれも濡れよう、すぐにまた晴の役者衆じゃ。些と休まっしゃれ。御酒のお流れを一つ進じよう。神職のことづけじゃ、一所に、あれへ参られい。

後見　なあよ。

太鼓の男　おおよ。（言交す。）

道化の面の男　かえっておぞうさとは思うけんどが。

笛の男　されば。

おかめの面の男　御挨拶（ごあいさつ）べい、かたがただで。（いずれも面を、楽しげに、あるいは背、あるいは胸にかけたるまま。）

後見　はい、お供して参りますで。

禰宜　さあさあ、これ。——いや、小児衆（こどもしゅ）——（渠（かれ）ら幼きが女の児（こ）二人、男の子三人にて、はじめより神楽を見て立つ）——一遊び遊んだら、暮れぬ間（ま）に帰らっしゃい。

後見　これ、立巌（たちいわ）にも、一本橋（いっぽんばし）にも、えっと気をつきようぞよ。

小児一　ああ。

かくて社家の方、樹立に入る。もみじに松を交う。社家は見えず。

小児二　や、だいぶ散らかした。

小児三　そうだなあ。

小児一　よごれやしないやい、木の葉だい。

小児二　木の葉でも散らばった、でよう。

女児一　もみじでも、やっぱり掃くの？

女児二　莫蓙の上に散っていれば、内でもお掃除するわ。

女児一　神様のいらっしゃる処よ、きれいにして行きましょう。

女児二　お縁は綺麗(きれい)よ。

小児一　じゃあ、階段(だんだん)から。おい、箒(ほうき)の足りないもの
は手で引掻(ひっか)け。

女児一　私(わたし)は袂(たもと)にするの。

小児二　乱暴だなあ、女のくせに。

女児三　だって、真紅(まっか)なのだの、黄色い銀杏(いちょう)だの、故(わざ)
とだって懐(ふところ)へさ、入(い)れる事よ。

折れたる熊手(くまで)、新しきまた古箒(ふるぼうき)を手(て)ん手(で)に
引出(ひきいだ)し、落葉(おちば)を掻寄(かきよ)せ掻集め、かつ掃きつつ
口々に唄(うた)う。

「お正月は何処(どこ)まで、

からから山の下まで、
土産は何じや。
榧や、勝栗、蜜柑、柑子、橘。」……

お沢　（向って左の方、真暗に茂れる深き古杉の樹立の中より、青味の勝ちたる縞の小袖、浅葱の半襟、黒繻子の丸帯、髪は丸髷。鬢やや乱れ、うつくしき俤に窶れの色見ゆ。素足草履穿にて、その淡き姿を顕わし、静に出でて、就中杉の巨木の幹に凭りつつ――間。――小児らの中に出づ）まあ、いいお児ね、媛神様のお庭の掃除をして、どんなにお喜びだか知れません――姉さん……（寂しく微笑む）あの、

小母(おば)さんがね、ほんの心ばかりの御褒美(ごほうび)をあげましょう。一度お供物(くもつ)にしたのですよ。さあ、お菓子。

小児(こども)ら、居分(いわか)れて、しげしげ瞻(みまも)る。

お沢　さあ、めしあがれ。

小児一　持って行(ゆ)くの。

女児一　頂いて帰るの。（皆いたいけに押頂(おしいただ)く。）

お沢　まあ。何故(なぜ)ね。

女児二　でも神様が下さるんですもの。

お沢　ああ、勿体(もったい)ない。私(わたし)はお三(さん)どんだよ、箒を一つ貸して頂戴(ちょうだい)。

小児二　じゃあ、おつかい姫だ。

女児一　きれいな姉（ねえ）さん。

女児二　こわいよう。

小児一　そんな事いうと、学校で笑われるぜ。

女児一　だって、きれいな小母（おば）さん。

女児二　こわいよう。

小児二　少しこわいなあ。

いい次ぎつつ、お沢（さわ）の落葉を掻寄（かきよ）する間（ま）に、少しずつやや退（すさ）る。

小児一　お正月かも知れないぜ。この山まで来たんだ。

小児二　や、お正月は女か。

小児三　知らない。

小児一　狐だと大変だなあ。

小児二　そうすりゃこのお菓子なんか、家へ帰ると、榧や勝栗だ。

小児三　そんなら可いけれど、皆木の葉だ。

女の児たち　きゃあ――

男の児たち　やあ、転ぶない。弱虫やい。――（かくて森蔭にかくれ去る。）

お沢　（箒を堂の縁下に差置き、御手洗にて水を掬い、鬢掻撫で、清き半巾を袂にし、階段の下に、少時ぬかずき拝む。静寂。きりきりきり、はたり。何処ともなく機織の音聞こゆ。きりきりきり、はたり。―

――お沢。面(おもて)を上げ、四辺(あたり)を眴(みまわ)し耳を澄ましつつ、やがて階段に斜(ななめ)に腰打掛(うちか)く。なお耳を傾け傾け、きりきりきり、はたり。間調子(まぢょうし)に合わせて、その段の欄干を、軽く手を打ちて、機織の真似し、次第に聞惚(ききほ)れ、うっとりとなり、おくれ毛(げ)はらはらとうなだれつつ仮睡(いねむ)る。）

仕丁　（揚幕(あげまく)の裡(うち)にて――突拍子(とっぴょうし)なる猿(さる)の声）きゃッきゃッきゃッ。（乃(すなわ)ち面長(つらなが)き老猿(ふるざる)の面を被(かぶ)り、水干(すいかん)烏帽子(えぼし)、事触(ことぶれ)に似たる態(なり)にて――大根(だいこん)、牛蒡(ごぼう)、太人参(ふとにんじん)、大蕪(おおかぶら)。棒鱈(ぼうだら)乾鮭(からざけ)堆(うずたか)く、片荷(かたに)に酒樽(さかだる)を積みたる蘆毛(あしげ)の駒(こま)の、紫なる古手綱(ふるたづな)を曳(ひ)いて出(い)づ）きゃッ、

きやッ、きやッ、おきやッ、きやア——まさるめでとうのう仕(つかまつ)る、踊るが手もと立廻り、肩に小腰(こごし)をゆすり合わせ、と、ああふらりふらりとする。きやッきやッきやッきやッ。あはははは。お馬丁(べっとう)は小腰をゆするが、蘆毛(あしげ)よ。(振向く)お厩(うまや)が近うなって、和(わ)どのの足はいよいよ健かに軽いなあ。この裏坂(うらざか)を帰らいでも、正面の石段、一飛びに翼(つばさ)の生じた勢(いきおい)じや。ほう、馬に翼が生(は)えて見い。われらに尻尾(しっぽ)がぶら下る……きやッきやッきやッ。いや化(ばけ)の皮の顕われぬうちに、いま一献(いっこん)きこしめそう。待て、待て。(馬柄杓(まびしゃく)を抜取る)この世の中に、馬柄杓などを何(なん)で

持つ。それ、それこのためじゃ。（酒を酌（く）む）ととと
とと。（かつ面を脱ぐ）おっとあるわい。きゃッ
きゃツきゃツ。仕丁（しちょう）めが酒を私（わたくし）するとあっては、
御前（おんまえ）様、御機嫌むずかしかろう。猿が業（わざ）と御覧（ごろう）ずれ
ば仔細（しさい）ない。途（みち）すがらも、度々（たびたび）の頂戴（ちょうだい）ゆえに、猿の
面も被ったまま、脱いでは飲み被っては飲み、質（しち）の
出入（だしい）れの忙（せわ）しい酒じゃな。あはははは。おおおお、
竜（たつ）の口（くち）の清水（しみず）より、馬の背の酒は格別じゃ、甘露甘
露。（舌鼓（したつづみ）うつ）たったったたつ、甘露甘露。きゃッ
きゃツきゃツ。はて、もう御前（おんまえ）に近い。も一度馬柄
杓でもあるまいし、猿にも及ぶまい。（とろりと酔

える目に、あなたに、階(きざはし)なるお沢の姿を見る。慌(あわただ)しくまうつむけに平伏(ひれふ)す）ははッ、大権現(だいごんげん)様、御免なされ下さりませ、御免なされ下さりませ。霊験(あらたか)な御姿(おすがた)に対し恐多(おそれおお)い。今やなぞ申しましたる儀は、全く譫言(たわごと)にござります。猿の面を被りましたも、唯おみきを私(わたくし)しよう、不届(ふとどき)ばかりではござりませぬ、貴女様御祭礼の前日夕、お厩(うまや)の蘆毛を猿が曳(ひ)いて、里方(さとかた)を一巡いたしますると、それがそのままに風雨順調、五穀成就(じょうじゅ)、百難皆除(かいじょ)の御神符(ごしんぷ)となります段を、氏子中(うじこじゅう)申伝(もうしつた)え、これが吉例(きちれい)にござりまして、従って、海つもの山つものの献上を、は、はッ、

御覧の如く清らかに仕(つかまつ)りまする儀でござりまして、偏(ひとえ)にこれ、貴女様御威徳にござります。お庇(かげ)を蒙(こうむ)りまする嬉(うれ)しさの余り、ついたべ酔いまして、申訳(もうしわけ)もござりませぬ。真平御免(まっぴらおゆる)され下されまし。ははッ、(恐る恐る地につけたる額(ひたい)を擡(もた)ぐ。お沢。うとうととしたるまま、しなやかに膝(ひざ)をかえ身動(みじろ)ぎす。長襦袢(ながじゅばん)の浅葱(あさぎ)の褄(つま)、しっとりと幽(かすか)に媚(なま)めく)それへ、唯今それへ参りまする。恐れ恐れ。ああ、恐れ。それ以(もっ)て、烏帽子きた人の屑(くず)とも思召(おぼしめ)さず、面(つら)の赤い畜生(ちくしょう)とお見許し願わしう、はッ、恐れ、恐れ。(再び猿の面を被りつつも進み得ず、馬の腹に添い身を

屈(かが)め、神前を差覗(さしのぞ)く）蘆毛よ、先へ立てよ。貴女様み気色(けしき)に触(ふ)る時は、矢の如く鬢櫛(びんぐし)をお投げ遊ばし、片目をお潰(つぶ)し遊ばすが神罰と承る。恐れ恐れ。（手綱を放たれたる蘆毛は、頓着(とんじゃく)なく衝(つ)と進む。仕丁は、ひよこひよこと従い続く。舞台やがて正面にて、蘆毛は一気に厩(うまや)の方(かた)、右手もみじの中にかくる。この一気に、尾の煽(あおり)をくらえる如く、仕丁、ハタと躓(つまず)き四(よ)つに這(は)い、面を落す。慌(あわ)てて懐(ふところ)に捻込(ねじこ)む時、間近(まぢか)にお沢を見て、ハッと身を退(すさ)りながら凝(じっ)と再び見直す）何(なん)じゃ、人か、参詣(さんけい)のものか。はて、可惜(あったら)二つない肝(きも)を潰(つぶ)した。ほう、町方(まちかた)の。……艶々(つやつや)と媚(なま)

めいた婦（おんな）じゃが、ええ、驚かしおった、おのれ！　しかも、のうのうと居睡（いねむ）りくさって、何処（どこ）に、馬の通るを知らぬ婦があるものか、野放図（のほうず）な奴（やつ）めが。――いやいや、御堂（みどう）、御社（みやしろ）に、参籠（さんろう）、通夜（つや）のものの、うたたねするは、神の御（お）つげのある折じゃと申す。神慮のほども畏（かしこ）い。……眠（ねむり）を驚かしてはなるまいぞ。（抜足（ぬきあし）に社前を横ぎる時、お沢。うつつに膝を直さんとする懐中より、一挺（ちょう）の鉄槌（かなづち）ハタと落つ。カタンと鳴る。仕丁。この聊（いささか）の音にも驚きたる状（さま）して、足を爪立（つまだ）てつつ熟（じっ）と見て、わなわなと身ぶるいするとともに、足疾（あしばや）に樹立（こだち）に飛入（とびい）る。間（ま）。――

懐紙(かいし)の端(はし)乱れて、お沢の白き胸(むな)さきより五寸釘(くぎ)パラリと落つ。）

白寮権現(はくりょうごんげん)の神職を真先(まっさき)に、禰宜(ねぎ)。村人(むらびと)一同。仕丁続いて出(い)づ――神職、年四十ばかり、色白く肥えて、鼻下(びか)に髯(ひげ)あり。落ちたる鉄槌を奪うと斉(ひと)しく、お沢の肩を摑(つか)む。

神職　これ、婦(おんな)。

お沢　（声の下に驚き覚(さ)め、身を免(のが)れんとして、階前には衆の林立せるに遁場(にげば)を失い、神職の手を振りもぎりながら）御免なさいまし、御免なさいまし。（一度階(きざはし)をのぼりに、廻廊の左へ遁ぐ。人々は縁下(えんした)よ

り、ばらばらとその行く方を取巻く。お沢。遁げつつ引返すを、神職、追状に引違え、帯際をむずと取る。ずるずる黒繻子の解くるを取って棄て、引据え、お沢の両手をもて犇と蔽う乱れたる胸に、岸破と手を差入る）あれ、あれ、あれえ。

神職　（発き出したる形代の藁人形に、すくすくと釘の刺りたるを片手に高く、片手に鉄槌を翳すと斉しく、威丈高に突立上り、お沢の弱腰を撞と蹴る）汚らわしいぞ！　罰当り。

お沢　あ。（階を転び落つ。）

神職　鬼畜、人外、沙汰の限りの所業をいたす。

禰宜　いや何とも……この頃(ごろ)の三(み)晩四(よ)晩、夜(よ)ふけ小(さ)ふけに、この方角……あの森の奥に当って、化鳥(けちょう)の叫ぶような声がしまするで、話に聞く、呪詛(のろい)の釘かとも思いました。なれど、場所柄(がら)ゆえの僻耳(ひがみみ)で、今の時節に丑(うし)の刻参(ときまいり)などは現(うつつ)にもない事と、聞き流しておったじゃが、何と先(ま)ず……この雌鬼(めすおに)を、夜叉(やしゃ)を、眼前に見る事わい。それそれ俯向(うつむ)いた頬骨(ほおぼね)がガッキと尖(とが)って、頤(あご)は嘴(くちばし)のように三角形(なり)に、口は耳まで真赤(まっか)に裂けて、色も縹(はなだいろ)になって来た。

般若の面の男　（希有(けう)なる顔して）禰宜様や、私(わし)らが事をおっしゃるずらか。

禰宜　気(け)もない事、この女夜叉(にょやしゃ)の悪相(あくそう)じゃ。

般若の面の男　ほう。

道化の面の男　（うそうそと前に出(い)づ）何と、あの、

　打込む太鼓……

〆太鼓の男　何じゃい。何じゃい。

道化の面　いや、太鼓ではない。打込む、それよ、カーンカーンと五寸釘……あの可恐(おそろし)い、藁の人形に五寸釘ちゅうは、はあ、その事でござりますかね。（下より神職の手に伸上(のびあが)る。）

笛の男　（おなじく伸上る）手首、足首、腹の真中（我が臍(へそ)を圧(おさ)えて反(そ)る）ひやあ、みしみしと釘の頭も見

えぬまで打込んだ。ええ、血など、ぼたれてはいぬずらか。

神職　（彼が言(ことば)のままに、手、足、胴腹(はら)を打返して藁人形を翳(かざ)し見る）血も滴(た)りょう。…藁も肉のように裂けてある。これ、寄るまい。（この時人々の立かかるを搔払(かいはら)う）六根清浄(ろっこんしょうじょう)、澄むらく、浄(きよ)むらく、清らかに、神に仕うる身なればこそ、この邪(よこしま)を手にも取るわ。御身(おみ)たちが悪く近づくと、見たばかりでも筋骨(すじぼね)を悩み煩(わず)らうぞよ。（今度は悠然(ゆうぜん)として階(きざはし)を下(くだ)る。人々は左右に開く）荒(あら)び、すさみ、濁り汚れ、ねじけ、曲れる、妬婦(ねたみおんな)め、われは、先ず

何処《いずこ》のものじゃ。

お沢　（もの言わず。）

神職　人の娘か。

お沢　（わずかに頭《かぶり》ふる。）

神職　人妻《ひとづま》か。

禰宜　人妻にしては、艶々《つやつや》と所帯気《しょたいげ》が一向《いっこう》に見えぬな。また所帯せぬほどの身柄《みがら》とも見えぬ。妾《めかけ》、てかけ、囲《かこい》ものか、これ、霊験《あらたか》な神の御前《みまえ》じゃ、明かに申せ。

お沢　はい、何も申しませぬ、ただ（きれぎれにいう）お恥《はずか》しう存じます。

神職　おのれが恥を知る奴か。――本妻正室と言わば

また聞こえる。人のもてあそびの腐れ爛（ただ）れ汚（よご）れものが、かけまくも畏（かしこ）き……清く、美しき御神（おんかみ）に、嫉妬（しっと）の願（ねがい）を掛けるとは何事じゃ。

禰宜　これ、速（すみやか）におわびを申し、裸身（はだかみ）に塩をつけて揉（も）んでなりとも、払い浄（きよ）めておもらい申せ。

神職　いや布気田（ふげた）、（禰宜の名）払い清むるより前に、第一は神の御罰（ごばつ）、神罰じゃ。御神（おんかみ）の御心（みこころ）は、仕え奉る神（かん）ぬしがよく存じておる。——既に、草刈り、柴（しば）刈りの女なら知らぬこと、髪、化粧（けわい）し、色香（いろか）、容（かたち）づくった町の女が、御堂（みどう）、拝殿とも言わず、この階（きざはし）に端近（はしぢか）く、小春（こはる）の日南（ひなた）でもある事か。土も、風も、

山気（さんき）、夜とともに身に沁（し）むと申すに。——

神楽の人々。「酔（よい）も覚（さ）めて来た」「おお寒（さむ）」など、皆（みんな）、襟（えり）、袖を掻合（かきあ）わす。

神職　……居眠りいたいて、ものもあろうず、棺（かん）の蓋（ふた）を打つよりも可忌（いまわし）い、鉄槌（かなづち）を落し、釘（くぎ）を溢（こぼ）す——釘は？……

禰宜　（掌（たなごころ）を見す）これに。

神楽の人々、そと集（つど）い覗（のぞ）く。

神職　即（すなわ）ち神の御心（みこころ）じゃ——その御心を畏み、次第を以て、順に運ばねば相成らん。唯今布気田（ふげた）も申す——三晩、四晩、続けて、森の中に鉄槌の音を聞い

たというが、毎夜、これへ参ったのか、これ、明に申せよ。どうじゃ。
お沢　はい、（言い淀み、言い淀み）今……夜……が、満……願……でございました。
神職　（御堂を敬う）ああ、神慮は貴い。非願非礼はうけ給わずとも、俗にも満願と申す、その夕に露顕した。明かに邪悪を退け給うたのじゃ。――先刻も見れば、その森から出て参って、小児たちに何か菓子ようのものを与えたが、何か、いつも日の中から森の奥に潜みおって、夜ふけを待って呪詛うたかな。
お沢　はい……あの……もうおかくしは申しません。

お山の下の恐しい、あの谿河（たにがわ）を渡りました。村方（むらかた）に、知るべのものがありまして、其処（そこ）から通いましたのでございます。

神楽の人々囁（ささや）き合う。

禰宜　知っておるかな。

――「なあ。」「よ。」「うむ。」「あれだ。」口々に――

後見　何が、お霜婆（しもばあ）さんの、ほれ、駄菓子屋の奥に、ちらちらする、白いものがあっけえ。町での御恩人ぞい。恥しい病（やまい）さあって隠れてござるで、ほっても垣（かき）のぞきなどせまいぞ、と婆さんが言うだでな。

笛の男　癩(かったい)ずらか。

太鼓の男　恥しい病ちゅうで。

おかめの面の男　ほんでも、孕(はら)んだ娘だべか。

禰宜　女子(おなご)が正しい懐妊は恥ではないのじゃ。それでは、毎晩、真夜中に、あの馬も通らぬ一本橋を渡ったじゃなあ。

道化の面の男　女の一念だで一本橋を渡らいでかよ。ここら奥の谿河(たにがわ)だけれど、ずっと川下(かわしも)で、東海道の大井川(おおいがわ)より大(で)かいという、長柄(ながら)川の鉄橋な、お前様。川むかいの駅へ行った県庁づとめの旦那どのが、終汽車(しまいぎしゃ)に帰らぬわ。予(かね)てうわさの、宿場(しゅくば)の娼婦(ふんばり)と寝

たんべい。唯おくものかと、その奥様ちゅうがや、梅雨ぶりの暗の夜中に、満水の泥浪を打つ橋げたさ、すれすれの鉄橋を伝ってよ、いや、四つ這いでよ。何が、いま産れるちゅう臨月腹で、なあ、流に浸りそうに捌き髪で這うて渡った。その大な腹ずらえ、――夜がえりのものが見た目では、大い鮟鱇ほどな燐火が、ふわりふわりと鉄橋の上を渡ったいうだね、胸の火が、はい、腹へ入って燃えたんべいな。

仕丁　お言の中でありますがな、橋が危くば、下の谿河は、巌を伝うて渡られますでな、お厩の馬はいつも流を越します。いや、先刻などは、落葉が重な

り重なり、水一杯に渦巻いて、飛々の巌が隠れまして、何処を渡ろうかと見ますうちに、水も、もみじで、一面に真紅になりました。おっと……酔った目の所為ではござりませぬよ。

禰宜　棚村。（仕丁の名）御身は何の話をするや。

仕丁　はあ、いえ、孕婦が鉄橋を這越すから見ますれば、丑の刻参が谿河の一本橋は、気もなく渡ると申すことで。石段は目につきます。裏づたいの山道を森へ通ったに相違はござりますまい。

神職　棚村、御身まず、その婦の帯を棄てい。

禰宜　かような婦の、汚らわしい帯を、抱いていると

いう事があるものか。

仕丁　私が、確と圧えておりますればこそで、うかつに棄てますと、このまま黒蛇に成って踠り廻りましょう。

禰宜　榛（神職名）様がおっしゃる。樹の枝へなりと掛けぬかい。

仕丁　樹に掛けましたら、なお、ずるずると大蛇に成って下ります。（一層胸に抱く。）

神職　棚村、見苦しい、森の中へ放し込め。

　仕丁、その言の如くにす。——

お沢　あの……（ふるえながら差出す手を、払いのけ

て、仕丁。森に行く。帯を投げるとともに飛返る。）

神職　何とした。

仕丁　ずるずるずると巻きましたが、真黒な一幅になって、のろのろと森の奥へ入りました。……大方、釘を打込みます古杉の根へ、一念で、巻きついた事でござりましょう。

神職　いずれ、森の中において、忌わしく、汚らわしき事をいたしおるは必定じゃ。さて、婦。……今日は昼から籠ったか。真直に言え、御前じゃぞ。

お沢　はい、（間）はい、あの、一七日の満願まで……この願を掛けますものは、唯一目、……一度でも、

人の目に掛りますと、もうそれぎりに、願が叶わぬと申します。昨夜までは、獣の影にも逢いません。もう一夜、今夜だけ、また不思議に満願の夜といいますと、人に見られると聞きました。見られたら、どうしましょう。口惜い……その人の、咽喉、胸へ喰いつきましても……

神職　これだ――したたかな婦めが。

お沢　ええ、あのそれが何になりましょう。昼から森にかくれました方が、何がどうでも、第一、人の目にかかりますまいと、ふと思いついたのです。木の葉を被り、草に突伏しても、すくまりましても、雉、

山鳥より、心のひけめで、見つけられそうに思われて、気が気ではありません。かえって、ただの参詣人のようにしております方が、何の触りもありますまいと、存じたのでございます。

神職　秘しがくしに秘め置くべき、この呪詛の形代を（藁人形を示す）言わば軽々しう身につけおったは——別に、恐多い神木に打込んだのが、森の中にまだ他にもあるからじゃろ。

お沢　いいえ、いいえ……昨夜までは、打ったままで置きました。私がちょっとでも立離れます間に——

——今日はまたどうした事でございますか、胸騒ぎが

しますまで。……

禰宜　いや、胸騒ぎが凄(すさま)じい、男を呪詛(のろ)うて、責殺(せめころ)そうとする奴が。

お沢　あの、人に見つかりますか、鳥獣(とりけもの)にも攫(さら)われます。故障が出来そうでなりません。それで……身につけて出ましたのです。そして……そして……お神(かん)ぬし様、皆様、誰方(どなた)様も――憎い口惜(くや)しい男の五体に、五寸釘を打ちますなどと、鬼でなし、蛇(じゃ)でなし、そんな可恐(おそろし)い事は、思って見もいたしません。可愛(かわい)い、大事な、唯一人の男の児(こ)が煩(わずら)っておりますものですから、その病を――疫病(やくびょう)がみを――

「ええ。」「疫病神（がみ）。」村人（むらびと）らまた退（しさ）る。

神職　疫病神を——

お沢　はい、封じます、その願掛（がんが）けなんでございます
もの。

神職　町にも、村にも、この八里四方、目下（もっか）疱瘡（ほうそう）も、
はしかもない、何の疾（やまい）だ。

お沢　はい……

禰宜　何病じゃ。

お沢　はい、風邪（かぜ）を酷（ひど）くこじらしました。

神職　（嘲笑（あざわら）う）はてな、風に釘を打てば何（なん）になる、
はてな。

禰宜　はてな、はてな。

村人らも引入れられ、小首を傾くる状(さま)、しかつめらし。

仕丁　はあ、皆様、奴凧(やっこだこ)が引掛(ひっかか)るでござりましょうで。

——揃(そろ)って嘲(あざけ)り笑う。——

神職　出来た。——掛(かか)ると言えば、身(み)たちも、事件に引掛りじゃ。人の一命にかかわる事、始末をせねば済まされない。……よくよく深く企(たく)んだと見えて——見い、その婦(おんな)、胸も、膝(ひざ)も、ひらしゃらと……（お沢、いやが上にも身を細め、姿の乱れを引(ひき)つくろい引つくろい、肩、袖、あわれに寂しく見ゆ）余りと

言えば雪よりも白い胸、白い肌《はだ》、白い膝と思うたれば、色もなるほど白々《しろじろ》としたが、衣服の下に、一重《ひとえ》か、小袖か、真白い衣《きぬ》を絡《まと》いいる。魔の女め、姿まで調《ととの》えた。あれに（肱《ひじ》長く森を指《さ》す）形代《かたしろ》を磔《はりつけ》にして、釘を打った杉のあたりに、如何《いか》ような可汚《けがらわ》しい可忌《いまいま》しい仕掛《しかけ》があろうも知れぬ。いや、御身《おみ》たち、（村人と禰宜《ねぎ》にいう）この婦《おんな》を案内に引立《ひった》てて、臨場裁断と申すのじゃ。怪しい品々《しなじな》かっぽじって来《こ》られい。証拠の上に、根から詮議《せんぎ》をせねばならぬ。さ、婦、立てい。

禰宜　立とう。

神職　許す許さんはその上じゃ。身は——思う旨（むね）がある。一度社宅から出直す。棚村（たなむら）は、身ととも参れ。——村の人も婦を連れて、引立（ひった）てて——

村人ら、かつためらい、かつ、そそり立ち、あるいは捜し、手近きを掻取（かきと）って、鍬（くわ）、鋤（すき）の類（たぐい）、熊手、古箒など思い思いに得ものを携う。

後見　先へ立て、先へ立とう。

禰宜　箒で、そのやきもちの頬（ほお）を敲（たた）くぞ、立ちませい。

お沢　（急に立って、颯（さつ）と森に行く。一同面（おもて）を見合すとともに追って入（い）る。神職と仕丁は反対に社宅——舞台上（うえ）には見えず、あるいは遠く萱（かや）の屋根のみ——に入（い）

る。舞台空(むな)し。落葉もせず、常夜燈(じょうやとう)の光幽(かすか)に、梟(ふくろう)。二度ばかり鳴く。）

神職　（威儀いかめしく太刀(たち)を佩(は)き、盛装して出(い)づ。仕丁相従い床几(しょうぎ)を提(ひっさ)げ出(い)づ。神職。厳(おごそか)に床几に掛(かか)る。傍(かたわら)に仕丁踞居(つくばい)て、棹尖(さおさき)に剣(けん)の輝ける一流の旗を捧(ささ)ぐ。――別に老いたる仕丁。一人。一連の御幣(ごへい)と、幣ゆいたる榊(さかき)を捧げて従う。）

お沢　（悄然(しょうぜん)として伊達巻(だてまき)のまま袖を合せ、裾(すそ)をずらし、打(うち)うなだれつつ、村人らに囲まれ出(い)づ。引添える禰宜の手に、獣(けもの)の毛皮にて、男枕(おとこまくら)の如くしたる包(つつみ)一つ、怪(あや)しき紐(ひも)にてかがりたるを不気味(ぶきみ)らしく提(さ)

げ来り、神職の足近く、どさと差置く。）

神職　神のおおせじゃ、婦《おんな》、下におれ。――誰《た》ぞ御灯《みあかし》をかかげい――（村人一人、燈《とう》を開《ひら》く。灯《ひ》にすかして）それは何だ。穿出《ほりだ》したものか、ちびりと濡《ぬ》れておる。や、（足を爪立《つまだ》つ）蛇《へび》が絡《から》んだな。

禰宜　身《み》どもなればこそ、近う寄っても見ましたれ。これは大木《たいぼく》の杉の根に、草にかくしてござりましたが、おのずから樹《き》の雫《しずく》のしたたります茂《しげみ》ゆえ、びしゃびしゃと濡れております。村の衆は一目見ますと、声も立てずに遁《に》ぎょうとしました。あの、円肌《まるはだ》で、いびつづくった、尾も頭も短う太い、むくりむ

くり、ぶくぶくと横にのたくりまして、毒気（どくき）は人を殺すと申す、可恐（おそろし）く、気味の悪い、野槌（のづち）という蛇そのままの形に見えました。なれども、結んだのは生蛇（なまへび）ではございませぬ。この悪念でも、さすがは婦（おんな）で、包（つつみ）を結（ゆわ）えましたは、継合（つぎあ）わせた蛇の脱殻（ぬけがら）でございますわ。

神職　野槌か、ああ、聞いても忌（いま）わしい。……人目に触れても近寄らせまい巧（たくみ）じゃろ、企（たく）んだな。解け、解け。

禰宜　（解きつつ）山犬か、野狐か、いや、この包みました皮は、狢（むじな）らしうございます。

一同目を注ぐ。お沢はうなだれ伏す。

神職　鏡――うむ、鉄輪――うむ、蠟燭――化粧道具、紅、白粉。おお、お鉄漿、可厭なにおいじゃ。……別に鉄槌、うむ、赤錆、黒錆、青錆の釘、ぞろぞろと……青い蜘蛛、紅い守宮、黒蜥蜴の血を塗ったも知れぬ。うむ、（きらりと佩刀を抜きそばむると斉しく、藁人形をその獣の皮に投ぐ）やあ、もはや陣じまいな、婦。――で、で、で先ず、男は何ものだ。

お沢　（息の下にて言う）俳優です。

――「俳優、」「ほう俳優。」「俳優。」と口々に言い継ぐ。

神職　何(なん)じゃ、俳優(やくしゃ)？……――町へ参ってでもおるか。国のものか。

お沢　いいえ、大阪に――

禰宜　やけに大胆に吐(ぬか)すわい。

神職　おのれは、その俳優(やくしゃ)の妾(めかけ)か。

お沢　いいえ。

神職　聞けば、聞けば聞くほど、おのれは、ここだくの邪淫(じゃいん)を侵す。言うまでもない、人の妾となって汚れた身を、鏝塗上塗(こてぬりうわぬり)に汚しおる。あまつさえ、身のほどを弁(わきま)えずして、百四、五十里、二百里近く離れたままで人を呪詛(のろ)う。

仕丁　その、その俳優（やくしゃ）は、今大阪で、名は何と言うかな。姉様（あね）。

神職　退（さが）れ、棚村。係（かか）る場合に、身らが、その名を聞き知っても、禍（わざわい）は幾分か、その呪詛（のろ）われた当人に及ぶと言う。聞くな。聞けば聞くほど、何が聞くほどの事もない。――淫奔（いんぽん）、汚濁、しばらくの間（ま）も神の御前（みまえ）に汚らわしい。茨（いばら）の鞭（むち）を、しゃつの白脂（しろあぶら）の臀（しり）に当てて石段から追落（おいおと）そう。――が呆（あき）れ果てて聞くぞ、婦（おんな）。――その釘を刺した形代（かたしろ）を、肌に当てて居睡（いねむ）った時の心持は、何とあった。

お沢　むずむず痒（かゆ）うございました。

禰宜　何(なん)じゃ藁人形をつけて……肌が痒い。つけつけと吐(ぬか)す事よ。これは気が変になったと見える。

お沢　いいえ、夢は地獄の針の山。――目の前に、茨に霜の降(ふ)りましたような見上げる崖(がけ)がありまして、上(あが)れ上れと恐しい二つの鬼に責められます。浅ましい、恥しい、裸身(はだかみ)に、あの針のざらざら刺さるよりは、鉄棒(かなぼう)で挫(くじ)かれたいと、覚悟をしておりましたが、馬が、一頭(ひとつ)、背後(うしろ)から、青い火を上げ、黒煙(くろけむり)を立てて駈(か)けて来て、背中へ打(ぶ)つかりそうになりましたので、思わず、崖へころがりますと、形代(かたしろ)の釘でございましょう、針の山の土が、ずぶずぶと、この乳(ちち)へ

……脇の下へも刺りましたが、ええ、痛いのなら、うずくのなら、骨が裂けても堪えます。唯くわッと身うちがほてって、その痒いこと、むず痒さに、懐中へ手を入れて、うっかり払いましたのが、つい、こぼれて、ああ、皆さんのお目に留ったのでございます。

神職　はて、しぶとい。地獄の針の山を、痒がる土根性じゃや。茨の鞭では堪えまい。よい事を申したな、別に御罰の当てようがある。何よりも先ず、その、世に浅ましい、鬼畜のありさまを見しよう。見よう。――御身たちもよく覚えて、お社近い村里の、

嫁、嬶々（かか）、娘の見せしめにもし、かつは郡（こおり）へも町へも触れい。布気田（ふげた）。

禰宜　は。

神職　じたばたするなりや、手取（てど）り足取り……村の衆（しゅ）にも手伝（てつだ）わせて、その婦（おんな）の上衣（うわぎ）を引剝（ひきは）げ。髪を捌（さば）かせ、鉄輪（かなわ）を頭に、九つか、七つか、蠟燭を燃（とも）して、めらめらと、蛇の舌の如く頂かせろ。

仕丁　こりゃ可（よ）い、可い。最上等の御分別（ごふんべつ）。

神職　退（さが）れ、棚村。さ、神の御心（みこころ）じゃ、猶予（ためら）うなよ。

――渠（かれ）ら、お沢を押取（おっとり）込めて、そのなせる事、神職の言（げん）の如し。両手を扼（とりしば）り、腰を押して、

真正面に、看客にその姿を露呈す。——

お沢　ヒイ……（歯を切りて忍泣く。）

神職　いや、蒼ざめ果てた、がまだ人間の婦の面じゃ。あからさまに、邪慳、陰悪の相を顕わす、それ、その般若、鬼女の面を被せろ。おお、その通り。鏡も胸に、な、それそれ、藁人形、片手に鉄槌。——うむその通り。一度、二度、三度、ぐるぐると引廻したらば、可。——何と、丑の刻の咒詛の女魔は、一本歯の高下駄を穿くと言うに、些ともの足りぬ。床几に立たせろ、引上げい。

渠は床几を立つ。人々お沢を抱すくめて床几

に載（の）す。黒髪高く乱れつつ、一本（ひともと）の杉の梢（こずえ）に火を捌（さば）き、艶媚（えんび）にして婀娜（しなやか）なる一個の鬼女（きじょ）、すっくと立つ——

お沢　ええ！　口惜（くや）しい。（殆（ほとん）ど痙攣的（けいれんてき）に丁（ちょう）と鉄槌を上げて、面（おもて）斜めに牙（きば）白く、思わず神職を凝視す。）

神職　（魔を切るが如く、太刀（たち）を振（ふり）ひらめかしつつ後退（あとずさ）る）したたかな邪気じゃ、古今の悪気（あくき）じゃ、激（はげし）い汚濁じゃ、禍（わざわい）じゃ。（忽（たちま）ち心づきて太刀を納め、大（おおい）なる幣を押取（おっと）って、飛蒐（とびかか）る）御神（おんかみ）、祓（はら）いたまえ、浄めさせたまえ。（黒髪のその呪詛（のろい）の火を払い消さんとするや、かえって青き火、幣に移りて、めらめ

らと燃上り、心火と業火(ごうか)と、もの凄(すご)く立累(たちかさな)る)やあ、消せ、消せ、悪火(あくび)を消せ、悪火を消せ。ええ、埒(らち)あかぬ。床(ゆか)ぐるみに蹴落(けおと)さぬかいやい。(狼狽(うろた)えて叫ぶ。人々床几とともに、お沢を押落(おしおと)し、取包んで蠟燭の火を一度に消す。)

お沢　(崩折(くずお)れて、倒れ伏す。)

神職　(吻(ほっ)と息して)――千慮の一失。ああ、致(いた)しようを過(あやま)った。かえって淫邪の鬼の形相(ぎょうそう)を火で明かに映し出した。これでは御罰(ごばつ)のしるしにも、いましめにもならぬ。陰惨忍刻(にんこく)の趣は、元来、この婦(おんな)につきものの影であったを、身ほどのものが気付かなん

だ。なあ、布気田（ふげた）。よしよし、いや、村の衆（しゅ）。今度は鬼女、般若の面のかわりに、そのおかめの面を被せい、丑（うし）の刻参（ときまいり）の装束（しょうぞく）を剝（は）ぎ、素裸（すはだか）にして、踊らせろ。陰を陽に翻すのじゃ。

仕丁　あの裸踊（はだかおどり）、有難い。よい慰み、よい慰み。よい慰み！

神職　退（さが）れ、棚村。慰みものではないぞ、神の御罰じゃ。

禰宜　踊りましょうかな。ひひひ。（ニヤリニヤリと笑う。）

神職　何さ、笛、太鼓で囃（はや）しながら、両手を引張（ひっぱ）り、ぐるぐる廻しに、七度（ななたび）まで引廻して突放せば、裸体（らたい）

の婦（おんな）だ、仰向けに寝はせまい。目ともろともに、手も足も舞踊（まい）ろう。

「遣（や）るべい、」「遣れ。」「悪魔退散の御祈禱（ごきとう）。」村人は饒舌（しゃべ）り立つ。太鼓は座につき、早（は）や笛きこゆ。その二、三人はやにわにお沢の衣（きぬ）に手を掛く。——

お沢　ああ、まあ、まあ。

神職　構わず引剝（ひきは）げ。裸体（はだか）のおかめだ。紅（あか）い二布（ふたの）……湯具（ゆぐ）は許せよ。

仕丁　腰巻（こしまき）、腰巻……（手伝いかかる。）

禰宜　おこしなどというのじゃ。……汚（よご）れておろうか

の。

後見　この婦なら、きれいでがすべい。

お沢　（身悶（みもだ）えしながら）堪忍して下さいまし、堪忍して下さいまし、それぱかりは、それぱかりは。

神職　罷成（まかりな）らん！　当社（とうやしろ）の掟（おきて）じゃ。が、さよういたした上は、追放（おっぱな）して許して遣る。

お沢　どうぞ、このままお許し下さいまし、唯お目の前を離れましたら、里へも家へも帰らずに、あの谿河（たにがわ）へ身を投げて、死（しん）でお詫（わび）をいたします。

神職　水は浅いわ。

お沢　いいえ、あの急な激しい流れ、巌（いわ）に身体（からだ）を砕い

ても。――ええ、情（なさけ）ない、口惜（くちお）しい。前刻（さっき）から幾度（いくたび）か、舌を噛（か）んで、舌を噛んで死のうと思っても、三日、五日、一目も寝ぬせいか、一枚も欠けない歯が皆弛（ゆる）んで、噛切（かみき）るやくに立ちません。舌も縮んで唇（くちびる）を、唇を噛むばかり。（その唇より血を流す。）

神職　いよいよ悪鬼の形相（ぎょうそう）じゃ。陽を以って陰を払う。笛、太鼓、さあ、囃せ。引立てろ。踊らせい。

　とりどりに、笛、太鼓の庭につきたるが、揃（そろ）って音（ね）を入（い）る。

お沢　（村人らに虐（しいた）げられつつ）堪忍ね、堪忍、堪忍して、よう。堪忍……あれえ。

からりと鳴って、響くと斉しく、金色の機の梭、一具宙を飛落つ。一同吃驚す。社殿の片扉、颯と開く。

巫女（階を馳せ下る。髪は姥子に、鼠小紋の紋着、胸に手箱を掛けたり。馳せ出でつつ、その落ちたる梭を取って押戴き、社頭に恭礼し、けいひつを掛く）しい、……しい……しい。……

一同茫然とす。

御堂正面の扉、両方にさらさらと開く、赤く輝きたる光、燦然として漲る裡に、秘密の境は一面の雪景。この時ちらちらと降りか

かり、冬牡丹（ふゆぼたん）、寒菊（かんぎく）、白玉（しらたま）、乙女椿（おとめつばき）の咲満（さきみ）てる上に、白雪（しらゆき）の橋、奥殿にかかりて玉虹（ぎょっこう）の如きを、はらはらと渡り出（い）づる、気高（けだか）く、世にも美しき媛神（ひめがみ）の姿見ゆ。

媛神　（白がさねして、薄紅梅（うすこうばい）に銀のさや形（がた）の衣（きぬ）、白地金襴（しろじきんらん）の帯。髻（もとどり）結いたる下髪（さげがみ）の丈（たけ）に余れるに、色紅（くれない）にして、たとえば翡翠（ひすい）の羽（はね）にてはけるが如き一条（ひとすじ）の征矢（そや）を、さし込みにて前簪（まえかんざし）にかざしたるが、瓔珞（ようらく）を取って掛けし襷（たすき）を、片はずしにはずしながら、衝（つ）と廻廊の縁に出（い）づ。凛（りん）として）お前たち、何をする。

――（一同ものも言い得ず、ぬかずき伏す。少しおくれて、童男と童女と、ならびに、目一つの怪しきが、唐輪と切禿にて、前なるは錦の袋に鏡を捧げ、後なるは階を馳せ下り、巫女の手より梭を取り受け、やがて、欄干擬宝珠の左右に控う。媛神、立直りて）――お沢さん、お沢さん。

巫女　（取次ぐ）お女中、可恐い事はないぞな、はばかり多や、畏けれど、お言葉ぞな、あれへの、おん前への。

お沢　はい――はい……

媛神　まだ形代を確り持っておいでだね。手がしび

れよう。姥、預ってお上げ。（巫女受取って手箱に差置く）――お沢さん、あなたの頼みは分りました。一念は届けて上げます。名高い俳優だそうだけれど、私は知りません、何処に、いま何をしていますか。

巫女　今日、今夜――唯今の事は、海山百里も離れまして、この姉さまも、知りますまい。姥が申上げましょう。

媛神　聞きましょう――お沢さん、その男の生命を取るのだね。

お沢　今さら、申上げますも、空恐しうございます、空恐しう存じあげます。

媛神　森の中でも、この場でも、私(わたし)に頼むのは同じ事。それとも思い留(とま)るのかい。

お沢　いいえ、私(わたし)の生命(いのち)をめされましても、一念だけは、あの一念だけは。——あんまり男の薄情さ、大阪へも、追縋(おいすが)って参りましたけれど、もう……男は、石とも、氷とも、その冷たさはありません。口も利(き)かせはいたしません。

巫女　いやみ、つらみや、怨(うら)み、腹立ち、怒(おこ)ったりの、泣きついたりの、口惜(くや)しがったり、武(む)しゃぶりついたり、胸倉(むなぐら)を取ったりの、それが何(なん)になるものぞ。いい女が相好崩(そうごうくず)して見っともない。何も言わずに、

心に怨んで、薄情ものに見せしめに、命の呪詛（のろい）を、貴女様（あなた）へ願掛（がんが）けさしゃった、姉（あね）さんは、おお、お怜悧（りこう）だの。いいお娘（こ）だ。いいお娘（こ）だ。さて何（なん）とや、男の生命（いのち）を取るのじゃが、いまたちどころに殺すのか。手を萎（なや）し、足を折り、あの、昔田之助（たのすけ）とかいうもののように胴中（どうなか）と顔ばかりにしたいのかの、それともその上、口も利かせず、死んだも同様にという事かいの。

お沢　ええ、もう一層（いっそ）（屹（きっ）と意気組む）ひと思いに！

巫女　お姫様、お聞きの通りでござります。

媛神　男は？

巫女　これを御覧遊ばされまし。（胸の手箱を高く捧げ、さし翳(かざ)して見せ参らす。）

媛神　花の都の花の舞台、咲いて乱れた花の中に、花の白拍子(しらびょうし)を舞っている……

巫女　座頭俳優(ざがしらやくしゃ)が所作事(しょさごと)で、道成寺(どうじょうじ)とか、……申すのでござります。

神職　ははっ、ははっ、恐れながら、御神(おんかみ)に伺い奉る、伺い奉る……謹(つつし)み謹み白(もう)す。

媛神　（――無言――）

神職　恐れながら伺い奉る……御神慮におかせられては――畏(かしこ)くも、これにて漏れ承りまする処におき

ましては——これなる悪女の不届な願の趣……
趣をお聞き届け……

媛神　肯きます。不届とは思いません。

神職　や、この邪を、この汚を、おとりいれにあい成りまするか。その御霊、御魂、御神体は、いかなる、いずれより、天降らせます。……

媛神　石垣を堅めるために、人柱と成って、活きながら壁に塗られ、堤を築くのに埋められ、五穀のみのりのための犠牲として、俎に載せられた、私たち、いろいろなお友だちは、高い山、大な池、遠い谷にもいくらもあります。——不断私を何と言ってお

呼びになります。

神職　はッ、白寮権現（はくりょうごんげん）、媛神（ひめがみ）と申し上げ奉る。

媛神　その通り。

神職　そ、その媛神におかせられては、直（す）ぐなること、正しきこと、明かに清らけきことをこそお司（つかさど）り遊ばさるれ、恁（かか）る、邪（よこしま）に汚れたる……

媛神　やみの夜（よ）は、月が邪（よこしま）だというのかい。村里に、形のありなしとも、悩み煩らいのある時は、私（わたし）を悪いと言うのかい。

神職　さ、さ、それゆえにこそ、祈り奉るものは、身を払い、心を払い、払い清めましての上に、正しき

理(ことわり)、夜(よる)の道さえ明かなるよう、風も、病(やまい)も、悪(あし)きをば払わせたまえと、御神(おんかみ)の御前(みまえ)に祈り奉る。

媛神　それは御勝手、私(わたし)も勝手、そんな事は知りません。

神職　これは、はや、恐れながら、御声(おんこえ)、み言葉とも覚えませぬ。不肖榛貞臣(はしばみさだおみ)、徒(いたず)らに身すぎ、口すぎ、世の活計に、神職は相勤めませぬ。刻苦勉励、学問をも仕(つかまつ)り、新しき神道を相学び、精進潔斎(しょうじんけっさい)、朝夕(あさゆう)の供物(くもつ)に、魂の切火(きりび)打って、御前(みまえ)にかしずき奉る……

……

媛神　私(わたし)は些(ちっ)とも頼みはしません。こころざしは受

けますが、三宝にのったものは、あとで、食べるのは、あなた方ではありませんか。

神職　えっ、えっ、それは決して正しき神のお言葉ではない。（わななきながら八方を礼拝す。禰宜、仕丁、同じく背ける方を礼拝す。）

媛神　邪な神のすることを御覧——いま目のあたりに、悪魔、鬼畜と罵らるる、恋の怨の呪詛の届く験を見せよう。（静に階を下りてお沢に居寄り）ずっとお立ち——私の袖に引添うて、（巫女に）姥、弓をお持ちか。

巫女　おお、これに。（梓の弓を取り出す。）

媛神　（お沢に）その弓をお持ちなさい。（簪の箭を取って授けつつ）　楊弓を射るように――釘を打って呪詛うのは、一念の届くのに、三月、五月、三年、五年、日と月と暦を待たねばなりません。いま、見るうちに男の生命を、いいかい、心をよく静めて。――唐輪。（女の童を呼ぶ）その鏡を。（女の童は、錦をひらく。手にしつつ）――的、的、的です。あれを御覧。（空ざまに取って照らすや、森々たる森の梢一処に、赤き光朦朧と浮き出づるとともに、テントツツン、テントツツン、下方かすめて遥にきこゆ）……見えたか。

お沢　あれあれ、彼処(あすこ)に――憎らしい。ああ、お姫様。

媛神　ちゃんとお狙(ねら)い。

お沢　畜生(ちくしょう)！（切って放つ。）

一陣の迅(はや)き風、一同聳目(しょうもく)し、悚立(しょうりつ)す。

巫女　お見事や、お見事やの。（しゃがれた笑(わらい)）おほほほほ。（凄(すご)く笑う。）

吹(ふき)つのる風の音凄(すさ)まじく、荒波の響きを交う。舞台暗黒。少時(しばらく)して、光さす時、巫女。ハタと藁人形を擲(なげう)つ。その位置の真上より振袖落ち、紅(くれない)の裙(すそ)翻り、道成寺の白拍子の姿、一たび宙に流れ、きりきりと舞いつつ真倒(まっさかさ)

に落つ。もとより、仕掛けものの造りものの人形なるべし。神職、村人ら、立騒ぐ。

お沢　ああ、どうしましょう、あれ、（その胸、その手を捜ろうとして得ず、空しく掻捜るのみ。）

媛神　それは幻、あなたの鏡に映るばかり、手に触るのではありません。

お沢　ああ唯貴女のお姿ばかり、暗い思は晴れました。媛神様、お嬉しう存じます。

丁々坊　お使いのもの！（森の梢に大音あり）――お髪の御矢、お返し申し上ぐる。……唯今。――（梢

より先ず呼びて、忽ち枝より飛び下る。形は山賤の木樵にして、翼あり、面は烏天狗なり。腰に一挺の斧を帯ぶ）御矢をばそれへ。――（女の童。階を下り、既にもとにつつみたる、錦の袋の上に受く。）

媛神　御苦労ね。

巫女　我折れ、お早い事でござりましたの。

丁々坊　瞬く間というは、凡そこれでござるな。何が、芝居は、大山一つ、柿の実ったような見物でござる。此奴、（白拍子）別嬪かと思えば、性は毛むくじゃらの漢が、白粉をつけて刎ねるであった。

巫女　何を、何を言うぞいの。何ごとや――山にばか

りおらんと世の中を見さっしゃれ、人が笑いますに。何を言うぞいの。

丁々坊　何か知らぬが、それは措け。はて、何とやら、テンツルテンツルテンツルテンか、鋸で樹をひくより、早間な腰を振廻いて。やぁ。（不器用千万なる身ぶりにて不状に踊りながら、白拍子のむくろを引跨ぎ、飛越え、刎越え、踊る）おもえばこの鐘うらめしやと、竜頭に手を掛け飛ぶぞと見えしが、引かついでぞ、ズーンジャンドンドンジンジンジリリリズンジンデンズンズン（刎上りつつ）ジャーン（忽ち、ガーン、どど凄じき音す。——神職ら腰をつ

く。丁々坊(ちょうちょうぼう)、落着き済まして）という処じゃ。天井から、釣鐘(つりがね)が、ガーンと落ちて、パイと白拍子が飛込む拍子に――御矢(おんや)が咽喉(のど)へ刺(ささ)った。（居(い)ずまいを直す）――ははツ、姫君。大(おお)釣鐘と白拍子と、飛ぶ、落つる、入違(いれちが)いに、一矢(ひとや)、速(すみやか)に抜取りまして、虚空(こくう)を一飛びに飛返ってござる。が、ここは風が吹きぬけます。途(みち)すがら、遠州灘(なだ)は、荒海(あらうみ)も、颶風(はやて)も、大雨(おおあめ)も、真の暗夜(やみよ)の大暴風雨(おおあらし)。洗いも拭(ぬぐ)いもしませずに、血ぬられた御矢は浄(きよ)まってござる。そのままにお指料(さしりょう)。また、天を飛びます、その御矢の光りをもって、沖に漂いました大船(たいせん)の難破一艘(そう)、乗組んだ

二百あまりが、方角を認め、救われまして、南無大権現（なむだいごんげん）、媛神様と、船の上に黒く並んで、礼拝（らいはい）恭礼をしましてござる。――御利益（ごりやく）、――御奇特（ごきどく）、祝着（しゅうじゃく）に存じ奉る。

巫女　お喜びを申上げます。

媛神　（梢を仰ぐ）ああ、空にきれいな太白星（たいはくせい）。あの光りにも恥かしい、……私（わたし）の紅（あか）い簪（かんざし）なんぞ。……

……

神職　御神（おんかみ）、かけまくもかしこき、あやしき御神、このまま生命（いのち）を召さりょうままよ、遊ばされました事すべて、正しき道でござりましょうか――榛貞臣（はしばみさだおみ）、

平（ひら）に、平に。……押して伺いたてまつる。

媛神　存じません。

禰宜　ええ、御神（おんかみ）、御神。

媛神　知らない。

——「平（ひら）に一同、」「一同偏（ひとえ）に、」「押して伺い奉る、」村人らも異口同音にやや迫りいう——

巫女　知らぬ、とおっしゃる。

神職　いや、神々の道が知れませいでは、世の中は東西南北を相失いまする。

媛神　廻ってお歩行（ある）きなさいまし、お沢さんをぐるぐ

ると廻したように、ほほほ。そうして、道の返事は——ああ、あすこでしている。あれにお聞き。

「のりつけほうほう、ほうほう、」——梟(ふくろう)鳴く。

神職　何、あの梟鳥(ふくろどり)をお返事とは？

媛神　あなた方(がた)の言う事は、私(わたし)には、時々あのように聞こえます。よくお聞きなさるがよい。

——梟、頻(しきり)に鳴く。「のりつけほうほう」——

老仕丁　のりつけほうほう。のりたもうや、つげたもうや。あやしき神の御声(おんこえ)じゃ、のりつけほうほう。

（と言うままに、真先に、梟に乗憑られて、目の色あやしく、身ぶるいし、羽搏す。）

――これを見詰めて、禰宜と、仕丁と、もろともに、のり憑かれ、声を上ぐ。――「のりつけほう。――のりつけほうほう、ほう。」次第に村人ら皆憑らる――「のりつけほうほう。ほうほう。ほうほう」――

神職　言語道断、ただ事でない、一方ならぬ、夥多しい怪異じゃ。したたかな邪気じゃ。何が、おのれ、何が、ほうほう……

（再び太刀を抜き、片手に幣を振り、飛より、煽り

かかる人々を激しくなぎ払い打ち払う間、やがて惑乱し次第に昏迷して——ほうほう。——思わず袂をふるい、腰を刎ねて）ほう、ほう、のりつけ、のりつけほう。のりつけほう。（備考、この時、看客あるいは哄笑すべし。敢て煩わしとせず。）（恁くして、一人一人、枝々より梟の呼び取る方に、ふわふわとおびき入れらる。）

丁々坊　ははははは。（腹を抱えて笑う。）

媛神　姥、お客を帰そう。あらしが来そうだから。

巫女　御意。

媛神　蘆毛、蘆毛。——（駒、おのずから、健かに、

すとすと出（い）づ。――ほうほうのりつけほうほう――と鳴きつつ来（きた）る。媛神。軽く手を拍（う）つや、その鞍（くら）に積めるままなる蕪（かぶ）、太根（だいこ）、人参（にんじん）の類（るい）、おのずから解けてばらばらと左右に落つ。駒また高らかに鳴く。

のりつけほうほう。――）

媛神　ほほほほ、（微笑（ほほえ）みつつ寄りて、蘆毛の鼻頭（はなづら）を軽く拊（う）つ）何だい、お前まで。（駒、高嘶（たかいなな）きす）（――この時、看客の笑声（しょうせい）あるいは静まらん。然（しか）らんには、この戯曲なかば成功たるべし。）――お沢さん、疲れたろう。乗っておいで。姥（うば）は影に添って、見送ってお上げ――人里まで。

お沢　お姫様。

巫女　もろともにお礼をば申上げます。

　蘆毛は、ひとりして鰭爪（ひづめ）軽く、お沢に行く。

丁々坊　ははは、この梟、羽を生（はや）せ。（戯れながら――熊手にかけて、白拍子の軀（むくろ）、藁人形、そのほか、釘、獣皮などを掻（か）き浚（さら）う。）

巫女　さ、このお娘（こ）。――貴女様に、御挨拶（ごあいさつ）申上げて……

お沢　（はっと手をつかう）お姫様。草刈（くさかり）、水汲（みずくみ）いたします。お傍（そば）にいとう存じます。

媛神　（廻廊に立つ）――私（わたし）の傍（そば）においでだと、一つ

目のおばけに成ります、可恐(こわ)い、可恐い、……それに第一、こんな事、二度とはいけません。早く帰って、そくさいにおくらし。――駒に乗るのに坐っていないで、遠慮のう。

お沢　（涙ぐみつつ）お姫様。

巫女　丁(ちょう)どや――丑(うし)の上刻(じょうこく)ぞの。（手綱(たづな)を取る。）

媛神　（鬢(びん)に真白(ましろ)き手を、矢を黒髪に、女性(にょしょう)の最も優しく、なよやかなる容儀見ゆ。梭(ひ)を持てるが背後(うしろ)に引添い、前なる女の童(わらべ)は、錦の袋を取出(とりい)で下より翳(かざ)し向く。媛神、半ば簪(かざ)して、その鏡を視(み)る。丁々坊は熊手をあつかい、巫女(みこ)は手綱を捌(さば)きつつ――大空(おおぞら)

に、笙（しょう）、篳篥（ひちりき）、幽（ゆう）なる楽（がく）。奥殿（おくでん）に再び雪ふる。まき
おろして）――

――幕――

底本：「海神別荘　他二篇」岩波文庫、岩波書店
　　１９９４（平成６）年４月18日第１刷発行
　　２００１（平成13）年１月15日第４刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十六巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年10月15日第１刷発行
初出：「文藝春秋」
　　１９２７（昭和２）年３月
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００７年４月９日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。